日本近代文学会　東海支部
2021 年度　シンポジウム・第 70 回研究会　ご案内

2022 年 2 月 19 日

日本近代文学会東海支部
支部長　　酒井　敏
幹事　加島　正浩
木戸浦豊和
奥村　華子

〈実証〉の愉楽―『森鷗外宛書簡集』が切り拓く創造の〈現場〉―

今年 2022 年は森鷗外のメモリアルイヤーである。文京区立森鷗外記念館では、〈生誕 160 年没後 100 年　鷗外 100 年の森へ〉というスローガンのもと第一弾の特別展「写真の中の鷗外　人生を刻む顔」が 1 月 9 日から開催されており、さらに 3 件の展覧会が続くと聞く。『日本近代文学』第 105 集の須田喜代次氏「『森鷗外宛書簡集』が切り拓く世界」で「文京区立森鷗外記念館が所蔵する、諸家の鷗外宛書簡は七八七通、その発信人は二一七名。この全ての書簡を翻刻紹介しようという試みが今回のプロジェクトである」と紹介された『文京区立森鷗外記念館所蔵　森鷗外宛書簡集』は『4〈か-こ〉編』が刊行され、企画の半ばに差し掛かった。

こうした機運に呼応して、森鷗外記念館の塚田瑞穂さんと『2〈あ-い〉編』の監修者でもある大妻女子大学の須田喜代次さんを東京からお迎えし、東海支部からは『3〈う-お〉編』の翻刻・編集に携わった岐阜大学の林正子さんと知立東高校の増田祐希さんがパネリストとして、中京大学の酒井が司会として加わって、表記シンポジウムを開催したいと思う。東海支部のメンバーが企画の一翼を担った縁もあるが、何より翻刻・編集そのものが、めったにない知的興奮を味わえる非常に面白い経験だったことが最大の理由である。人間関係に裏打ちされた表現の機微から同時代の状況に至るまで、広汎な発見と新鮮な刺激に満ち、最終的に行き着く参照すべき事実があるからこそ味わえる、正に「〈実証〉の愉楽」と呼ぶにふさわしい体験であった。

「テエベス百門の大都」鷗外の広さそのまま、書簡の書き手は多岐にわたり、話題も多様なら、候文から言文一致、加えてドイツ語や漢文と文章そのものも個性を窺わせて多様。本場で目の当たりにした演劇や壮麗な建築、名匠のタブローなどの印象を伝える便りがあるかと思うと、同じように留学先から発信されてはいても、医学教育や自然科学への回路が開ける後進の軍医などからの便りもある。いかにも文学者らしい作品をめぐるやり取りや会合の案内、雑誌や書籍の編集に関わる書簡があるのは当然として、時に些細な日常生活の一コマが垣間見える書簡や意外な人間関係にも出会う。絵葉書や国際郵便、戦地の鷗外に送られた軍事郵便を含めた通信の方法やツール、到着までの時間などの郵便事情、さらに発信者の移動を通してツーリズムなどへの興味も湧く。このような書簡の面白さを読者と共有できるように一通一通読み拓いてゆく営みは、さながらタイムマシンで鷗外や書簡の発信者が生きた時代、彼らの〈現場〉を訪れる趣きなのだ。

パネリストの方々のご発表、さらにフロアの皆様との質疑応答を通して、そんなワクワク感一杯の時間を創り出せるよう努めたい。従来の実証研究の枠を破るのはもとより、興味・関心の拡大から研究方法においても新たな地平を「切り拓く」シンポジウムとなるよう念じつつ、多くの会員の皆様のご参加をお願い申し上げる次第である。

【日時・開催方法】
〇日時：2022 年 3 月 12 日（土）14 時～18 時
〇開催方法：オンライン開催（Zoom ウェビナーを使用）
※支部会員以外の方は、下記 URL から参加登録をお願いします。
https://forms.gle/CzRDHbiWbex9o6mb7
〇テーマ：〈実証〉の愉楽―『森鷗外宛書簡集』が切り拓く創造の〈現場〉―

【シンポジスト】
〇塚田瑞穂（文京区立森鴎外記念館）
「鷗外を広める－文学館資料としての鷗外宛書簡」
〇増田祐希（愛知県立知立東高校）
「書簡を取り巻く情報環境を考える――鷗外宛書簡の翻刻を通して」
〇林正子（岐阜大学）
「鷗外『標準於伽文庫』編纂の意義－巖谷小波との往還による成果－」
〇須田喜代次（大妻女子大学）
「『森鷗外宛書簡集』が切り拓く“鷗外文化圏”」

【タイムスケジュール】
・14：00～14：15　開会・趣旨説明
・14：15～14：40　発表①　塚田瑞穂
・14：40～15：05　発表②　増田祐希
・15：05～15：30　発表③　林正子
・15：30～15：55　発表④　須田喜代次
・15：55～16：20　休憩・質問受付
・16：20～16：40　パネリストによる補足・相互の質問
・16：40～17：55　質問への回答・フロアとの質疑応答
・17：55～18：00　閉会

【発表要旨】

鷗外を広める－文学館資料としての鷗外宛書簡

文京区立森鷗外記念館副館長兼学芸員　塚田瑞穂

文京区立森鷗外記念館では、主に書簡・原稿・貴重書・遺品などの鷗外資料と、鷗外や文京区にゆかりのある文学作品、文学者に関する資料を収集・保存している。当館の前身である文京区立鷗外記念本郷図書館から受け継いだ資料も含めて、現在、3 千点足らずの鷗外資料、約 6 千点の森類（鷗外三男）旧蔵資料、約 1 万 5 千点の図書資料を所蔵している。

鷗外資料の中核をなすのが、書簡（総点数 2,294）であり、そのうち 787 点が知友の人々からの鷗外宛書簡である。鷗外筆書簡は、『鷗外全集』第 36 巻　二刷（岩波書店、1989 年）に収録されているが、鷗外宛書簡については、研究論文や展覧会で一部発表されてはいるものの多くは未発表である。文学館活動の一環として、そして鷗外顕彰のさらなる発展につながるようにと立ち上げた「鷗外宛書簡集プロジェクト」について紹介する。

書簡を取り巻く情報環境を考える――鷗外宛書簡の翻刻を通して

愛知県立知立東高校　増田祐希

今日、我々は好むと好まざるとにかかわらず、膨大な量の情報を浴びて暮らしている。一説によると「現代日本人が 1 日に触れる情報量が平安時代の一生分である」が「脳のはたらきは変わっていない」と言われる。また、その一方で「人間が 1 日に受け取る情報には限度がある」という話もある。では、明治・大正を生きた森鷗外やその周辺の人物たちは、どのように情報と接していたのだろうか。

今回は、鷗外宛の書簡を通して、書簡の引用で紡がれた史伝『北条霞亭』や近代に成立した郵便の役割、情報収集のツール・メディアの変化などを手がかりに、当時の人々の情報の発信、受信の方法の一端を考えていく。さらに、書簡の翻刻の際、インターネット検索を担当した者として「当時の逓伝の実況」(『北条霞亭』「その五十六」) と現在の情報環境との比較をすることで、翻刻された書簡を読む楽しみの枠を広げていきたい。

鷗外『標準於伽文庫』編纂の意義　－巌谷小波との往還による成果－

岐阜大学　林正子

鷗外が松村武雄、鈴木三重吉、馬淵冷佑とともに編纂した培風館「標準於伽文庫」(1920 年 3 月～1921 年 8 月) は、『日本童話』『日本伝説』『日本神話』各上下巻全 6 巻の総称である。今回の報告では、平凡社『日本お伽集　神話・伝説・童話 1 』(東洋文庫 220 1972 年 11 月)、同 2 (東洋文庫 233 1973 年 5 月) として復刻されている、鷗外最晩年の文業成立の一要因が、巌谷小波との交流がもたらした成果であることを論じる。文壇における鷗外と小波の交差として、演劇改良問題や歴史的仮名遣いに関する論争が挙げられるが、今回は、鷗外宛小波の書簡を参照することによって、博文館『少年文学叢書』第一篇『こがね丸』(1891 年 1 月) への序文執筆を鷗外に依頼した経緯を確認するとともに、『日本昔噺』(1894～96) 『日本お伽噺』(1896～98) 『世界お伽噺』(1899～1908) 『世界お伽文庫』(1910)などの小波の業績を受けて、『標準於伽文庫』が編纂された意図や鷗外の文業における意義を明らかにすることをめざしている。

『森鷗外宛書簡集』が切り拓く“鷗外文化圏”

大妻女子大学　須田喜代次

「シンポジウム趣意書」に書かれておりますように、わたくしは『森鷗外宛書簡集 2 〈あーい〉編』に携わった関係で、今回の会に参加させていただくことになりました。その作業の経験から学んだことのいくつかをお話したいと思っています。

ただし、当該書に「解説」として「「少々我儘ナル」鷗外と「癇癪持」通泰との交情―森鷗外宛井上通泰書簡を巡って―」という拙文を寄せたほかに、収録書簡に関連して「鷗外、高蔭、そして柏亭―鷗外文化圏探求―」(『大妻国文』第 51 号、2020 年 3 月)、また「『森鷗外宛書簡集』が切り拓く世界」(『日本近代文学』第 105 集、2021 年 11 月) を既に書かせていただいております。

今回は、そこで触れたこととできるだけ重ならないようにして、鷗外森林太郎を囲繞していた〈文化圏〉を照らし出せたらと思っています。